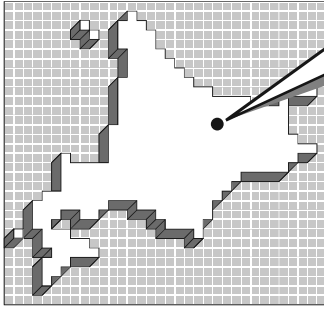


## 連載 わがマチの自慢 No.29



## 訓子府町

「ちょっといいね！」が  
たくさんあるまちを  
めざして

訓子府町はオホーツク

圏の中核都市北見市の中心部から南西に位置し、車で二〇分ほどの距離にある。東西二二km、南北一六km、総面積は一九〇・九五km<sup>2</sup>と、オホーツク管内の市町村では最も小さい。人口は約四、七〇〇人である。

町の中央部を常呂川が、北部を訓子府川が西から東に流れ、河川流域には平野が、河川をはさむようにゆるやかな高台が形成されている。耕地面積は七千haで、流域沿いには田と畑が、高台の平坦地には畑が広がっており、農業を基幹産業とする。町の南側は山林に覆われ

ている。

北見・置戸間の民間の路線バスが唯一の公共交通機関で、通勤、通学、通院、買い物など生活消費活動の多くを北見市に依存している。

町内には、北海道立総合研究機構北見農業試験場、ホクレン農業総合研究所訓子府実証農場といった試験研究機関もある。

「ちょっと  
いいね！」が  
たくさんある  
まちづくり

「第6次訓子府町総合計画」の後期の五年間が今年度からスタートした。平成二九年三月に策定されたこの総合計画では、町の将来像を『「ちょっ

といいね！」がたくさんある

まち』とし、この将来像を実現するため、産業、教育、福祉など七つの基本目標を設定している。後期は特に、農業の持続的な発展や地域商業の活性化、インフラ整備、防災力の強化など「強いまちプロジェクト」、「子育てや教育の充実、まちづくりを担う人材の育成など「人を育てるまちプロジェクト」、「住環境の整備や移住定住の促進、高齢者や障がい者の活動支援など「安心して住み続けられるまちプロジェクト」の三つを重点プロジェクトとし、これまでの取り組みを加速し、「ちょっといいねがたくさんあるまちづくり」の推進をめざしている。

役場の隣に、平成二八年に

開園した町立の幼保連携型施設『認定こども園』わくわく園』がある。とてもきれいでぬくもりが感じられる建物である。町民だけではなく、

町内の事業所に通勤している家庭の子どもも預かっている。

この子ども園も「ちょっといいねー」の一つだ。

農業分野では、「農業基盤整備の推進」、「農業(畜産)経営の近代化と効率化」、「農業後継者の育成」、「魅力ある農業と理解される農業の確立」などの項目で具体的な施策が並んでいる。町としては、特に基盤整備(土地改良)事業に力を入れてきており、今日の生産力の礎となっていると考えている。今年度も五地区で、区画整理や暗渠排水整備、

火山灰客土、用水路整備やリールマシン導入等の事業が進んでいる。

### 地域経済を支える農業生産

火山灰客土、用水路整備やリールマシン導入等の事業が進んでいる。

協など八農協が合併して誕生したJAきたみらいは、訓子府町のほか常呂町を除く北見市と置戸町に区域がまたがっている。

訓子府町ではたまねぎ、小麦や馬鈴しょ、てん菜の畑作

また、町内の自社鉱山から採掘した石灰岩を原料としてタンカル製品などの製造・卸売りをしている訓子府石灰工業株式会社、ピッカーやタッ

三品、酪農を基幹として、米や小豆などの豆類、メロンや加工用スイートコーンなど多様な野菜を生産している。全就業人口のおよそ四割が農業に従事している。農業生産額(JA販売額)は増加してきており、昨年度は一四七億円で、たまねぎが四三%、生乳が二三%、馬鈴しょが一%を占めている。

パーなどたまねぎの作業機械の開発・生産を行っている訓子府機械工業株式会社、町内などで契約栽培しているスイートコーンを使ってコーンパウダーなどを加工製造している味の素食品北海道株式会社などの農業関連事業所もあり、町の経済に大きな役割を果たしている。

平成一五年に、訓子府町農

今年は、六月と七月に三度

の大雨やひょうにより、たまねぎや馬鈴しょ、てん菜の畑が水に浸かったり、茎葉が損傷したりする被害がおおよそ一、一〇〇haで発生しており、たまねぎでは約四〇〇haを廃耕するに至った。被災された農家の皆様には心からお見舞い申し上げます。

### たまねぎなど主要品目の動向

図1に、たまねぎ、小麦、馬鈴しょ、てん菜の主要四作物の二〇〇〇(平成一一)年以降の作付面積の推移を示した。たまねぎは増加傾向、小麦は面積を維持している一方で、馬鈴しょやてん菜は減少している。

当町を含めたJAきたみらい管内は日本一のとまねぎ産地である。「きたみらい玉葱振興会」は、農協合併に伴い各地区の振興会が結集して誕生したJAの作物別生産者組織で、第五〇回（令和二年度）日本農業賞集団組織の部で見事大賞を受賞した。全国のた

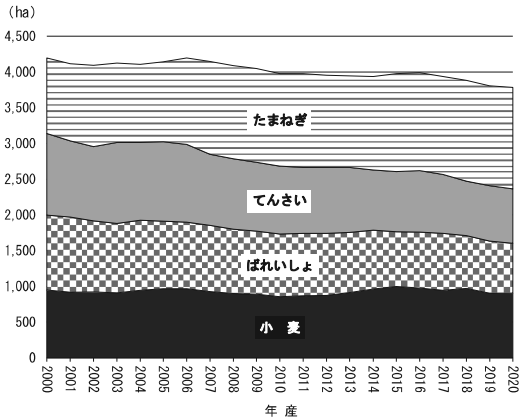


図1 主要4作物の作付面積の推移

資料：農林水産省「作付面積統計」



天皇杯受賞を祝う垂れ幕

一と現品審査の徹底など、生産者が互いに切磋琢磨し、一

まねぎ作付けの二割を占めるに至った大産地の振興会として、特に格差がみられた地区ごとの品質の向上と高位平準化に向けた技術の開発・普及や選果基準の統

丸となって産地の評価向上に努めてきた取り組みなどが、大規模産地のトップランナーのモデルとして高く評価され



▲小麦の収穫

たものである。小麦は大型コンバインによる組織的な収穫作業体系が整備されている。オペ

▼馬鈴しょ（開花）



レーターが特定の若い世代に集中するなどの課題が挙げられている。

一方、馬鈴しょとてん菜の作付け減少の原因は高齢化や労働力不足である。省力化に向け、馬鈴しょに（加工用）については、JAが大型ハーベスターを二台（自走式とけん引式）導入するなどして、令和二年から収穫と粗選別作業



てん菜

の受託を始めている。また、てん菜では、省力的な直播栽培の面積が六割近くに達してきた。

図2には、二〇〇〇年以降の生乳生産量と経産牛頭数の推移を示した。一時は減少していた経産牛頭数も回復しており、生乳生産量は三万トまで増加し、経産牛一頭当たりの生乳生産量も昨年度は一

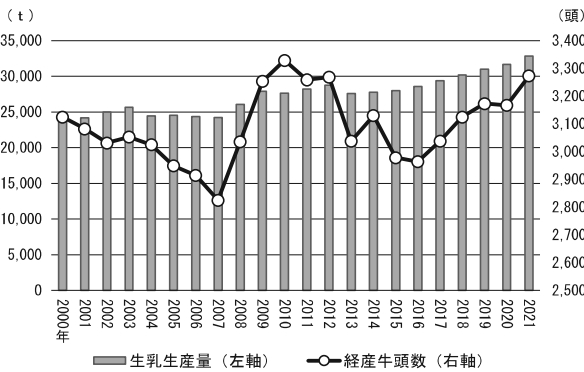


図2 生乳生産量の推移

資料：訓子府町調べ



たまねぎ

万トを超えるまでになった。飼養戸数は四〇戸ほどである。共同利用模範牧場が開設されており、雌牛の預託育成が行われている。二つのTMRセンターも稼働しており、乳量の増加に大きな役割を果たしている。牧草の収穫・調製作

業の外部委託化が今後の課題である。

**規模は小さくとも  
たまねぎで  
販売額を確保**

農業生産を担う農家等の動向であるが、二〇

二〇年農林業センサスによると、総

農家戸数は二九二戸、農業経営体数は二九五経営体（うち個人経営体二七四、法人経営体一九）で、前回の二〇一五年調査に比べそれぞれ七・六％、六・九％減少しているが、減少率はオホーツク管内平均（二四・七％、一三・五％）よりも小さい。

農業経営体の経営耕地面積は六、八五一haで、一経営体当たりの経営耕地面積は二三八haとなり、前回調査よりも三ha増加したが、オホーツク管内（平均三八・三ha）では最も小さい。オホーツク管内と訓子府

町の経営耕地面積規模別の経営体数割合を図3に示したが、オホーツク管内のモード層は「二〇〇〇ha未満」であるのに対し、訓子府町は「一〇〇〇〇ha未満」である。

農産物販売金額規模別の経営体数をみると、「一千万円から三千万円未満」の層が最も多く三三％、次いで「三千

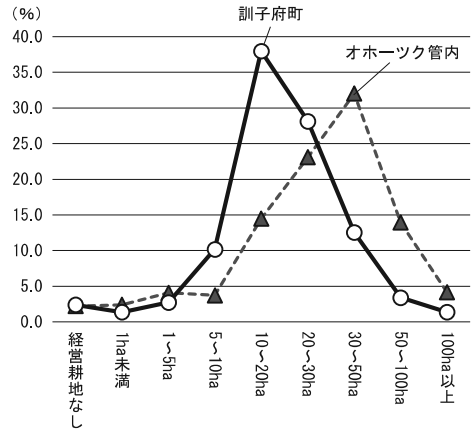


図3 経営耕地面積規模別農業経営体数割合

資料：農林水産省「2020年農林業センサス」

万円から五千万円未満」が三三％を占めている。たまねぎを中心とした露地野菜の販売金額が1位の経営体数が四八％ある。オホーツク管内は、「三千万円から五千万円未満」が最も多く二〇％、次いで「一千万円から三千万円未満」が二九％となっている(図4)。

訓子府町の農業経営体は、オ

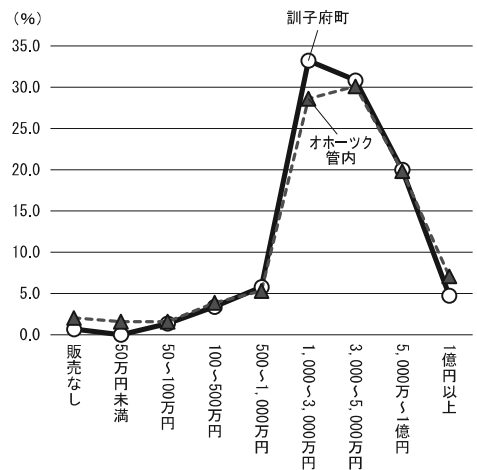


図4 農産物販売金額規模別農業経営体数割合

資料：農林水産省「2022年農林業センサス」

ホーツク管内の他市町村よりも経営面積は小さいものの、農業基盤の整備やたまねぎの生産性向上などにより、農産物販売金額はオ

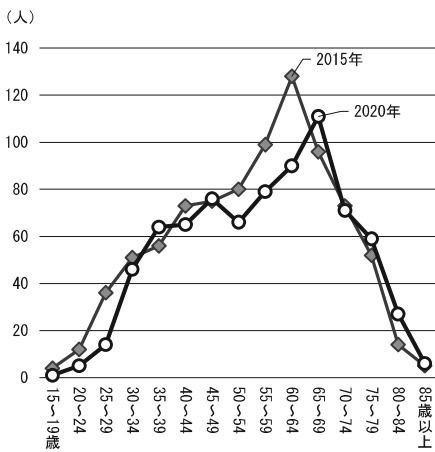


図5 個人経営体の基幹的農業従事者数

資料：農林水産省「農林業センサス」

ホーツク管内と同等のレベルとなっている。

基幹的農業従事者数(個人経営体)は七八〇人で五年前に比べ八・七％減少した。年齢別にみると、五年前に比べ五〇歳から六四歳までの層の減少が目立つが、「三五から三九歳」と「四五から四九歳」の層は増加している(図5)。

明るい兆しである。

なお、町内の農業法人は農業支援組織を除けば一戸一

法人であったが、今年の四月から四戸による畑作経営の法人がスタートした。既存の機械共同利用組合が基礎となっており、後継者確保の問題から複数戸による法人の設立に至ったとのこと。今後の波及効果が期待される。

## 増えてきた Uターン就農

J Aきたみらいが組合員に対して行っている今後の営業意向調査の結果に基づき、特に、リタイアの時期が近づいているにもかかわらず、後継者が確保できていない経営について、町をはじめ関係機

関が連携して対応に当たっている。

町内では農地の需要がまだ高く、既存農家による離農跡地の引き受けに力を入れている。この一〇年間の新規就農者数は五〇名程度で、農地を取得するなどして新たに就農（新規参入）した者は三名と少ない。直近三力年でも、いわゆるUターン就農者が五七％、学卒就農者が三六％である。十分な数ではないが、健闘していると言えるのではないか。しかしながら将来を見据えたときに新規参入に対応する必要がある、町では、研修などの受入や就農相談体制の整備に加え、就農時の祝い金支給、農地や住宅の取得等に対する助成措置を

国の支援制度とは別に用意している。

## 活躍する 若手農業者

訓子府町にはJ Aの作物別生産組織に加えて、四〇歳以下の後継者が主体で作物を横断した組織として「訓子府町畑作専門部」があり、各種の栽培試験や視察研修などに取り組んでいる。また、普及センター等の指導の下で4 Hクラブの活動も活発に行われている。これらの組織はいずれも昭和五〇年代に設立されており、四〇年以上の歴史がある。

さらに町では平成二七年度から、北見農業試験場と若手

農業者との交流を深めるとともに、若手農業者のチャレンジ精神を育もうと「チャレンジアッププロジェクト」に取り組んでいる。試験場の研究員を講師とした講習会の開催や共同研究の実施を内容とする。コロナ禍のため、講習会はこの三年間休止している。

共同研究は一つのテーマを三年間かけて行うことを基本的にしており、最初のテーマとして、雪割り・雪踏みによる土壌凍結深の制御技術に関する実証試験に取り組み、当地域の効果的な野良いも防除対策の普及に貢献してきた。その後のはたまねぎをテーマとして取り上げ、現在は極早生品種の比較試験等に取り組んでいる。このプロジェクトにはJ

Aや普及センターも参画しており、試験結果は他の生産者組織にも発信している。

## 特産メロンの危機

メロンは町のコントリースーンにも描かれている代表的な特産品の一つである。今年、生産を担ってきた「訓子府メロン振興会」が設立五〇周年を迎えた。七月には記念事業の一環として消費者からメロンへの熱い想いを川柳で募集し、翌月には、町長も審査委員に加わり入賞作品を選考した。

北見市場に出荷して「くんねっぶメロン」のブランドを築き、ピーク時の平成一〇年には一二九戸、一九haまで栽

培が拡大した。その後は後継者不足や早出したまねぎの作業競合などもあって減少し、本年度は三五戸、四・四haとなった。振興会では栽培戸数・面積の減少に歯止めをかけブランド力を強化しようと平成二九年、町やJAの支援を受けて「くんねっぶメロン」の商標登録を行い、シールをメ



特産の「くんねっぶメロン」

ロンなどに貼って消費者にアピールしている。メロンの即売会などを行ってきたAコープ店舗が令和二年に閉店したことによって、町民が「くんねっぶメロン」を目にする機会が減り、認知度が薄れていくことも心配される。

## 独自の クリーン農業推進

昭和六二年にたまねぎの特別栽培に取り組んで以来、訓子府町は他地域に先駆けクリーン農業の推進に力を入れてきた。平成八年には町の環境保全型農業推進方針が策定されたことに伴い、クリーン農業推進協議会を設立している。現在、YES! clean



麦稈ロール  
酪農家の堆肥との交換が行われている

登録集団はないものの、たまねぎや馬鈴しょの「減農薬研究会」、「フードプランの会」(コープこうべ)、たまねぎの「YYグループ」(イトーヨーカ堂)、「有機栽培の会」(有機JAS取得)などの部会において、販売先とも連携し特別栽培農産物に係るガイドラインなどに沿った化学肥料・農薬節減の組織的な取り組み

を続けている。部会の戸数や面積は近年停滞しているが、化学肥料や農薬の節減意識は農業者全般に高いという。

### 〈取材後記〉

訓子府町を訪れたのはおよそ一〇年ぶり。空き店舗が少し目につくようになったが、電線が地中化された市街地の街並みはきれいだ。町の将来像が『「ちよつといいね!」がたくさんあるまち』というところで、訓子府農業の「ちよつといいね!」を少しでも紹介できればと思いつながら取材した。十分紹介できてはいないが、地域振興や住民福祉などの分野を含めた「ちよつといいね!」の積み重ねが町の発

展につながるに違いないと感じた取材であった。

訓子府町役場の皆様には、取材の対応や資料、写真の提供、原稿の確認など多くのご協力をいただきました。誌面を借りてお礼申し上げます。

特別研究員

三津橋 真一



高級菜豆

## 研究所だより

本年度六月末現在の当研究所の調査研究課題につきましては、前号の「研究所だより」で紹介しましたが、その後、新たに次の課題を受託しました。

### 業務・研究課題名

農村集落機能維持活動事例調査委託業務

期限 二〇二三年二月

委託者 北海道

### 人事異動 (9月30日付)

△退 職▽

専任研究員 井上 淳生